

武蔵野幕屋開設51周年記念 祈祷会

聖霊と祈り心

――コリント前第14章12～15節、エペソ書第6章13～20節――

1991年9月22日

小池辰雄

詩「わが兄に寄す」 主体的真理 キリストの中に体当たり 霊と心をもって祈る 円現 キ
リストの聖霊の権威 あなた方は天下一品

【コリント前14】

12 然らば汝らも霊の賜物を慕う者なれば、教会の徳を建つる目的にて賜物の豊かならんことを求めよ。 13 この故に異言を語る者は自ら称き得んことをも祈るべし。 14 我もし異言をもて祈らば、我が霊は祈るなれど、我が心は果を結ばず。 15 然らば如何にすべきか。我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳い、また心をもて謳わん。

【エペソ6】

10 終に言わん、汝ら主にありて其の大能の勢威に頼りて強かれ。 11 悪魔の術に向かい立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。 12 我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌とるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。 13 この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。 14 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、正義を胸当として胸に当て、 15 平和の福音の備を靴として足にはけ。 16 この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。 17 また救の胃および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。 18 常にさまざまの祈と願とをなし、御霊によりて祈り、また目を覚し凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。 19 又わが口を開くとき、言を賜わり、憚らずして福音の奥義を示し、 20 語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

●詩「わが兄に寄す」

私が大分前に書いた或る詩があるんですが、

「わが兄に寄す」

という。多分、あなた方はご存知ないと思います。



「わが兄に寄す」

神は先ず兄を先駆者として、
その死をもつてわがために
御国への道を開き給った。

私の今日あるは、

或る第一の道しるべは正にこの兄の実存にあった。

彼は今、ねんごろに私に告げる。

『汝の星に従つ限り、

なんじ必ずや栄光の港に到りつく。

私があのかく早く世を去らなかつたなら、

上天がかくも深く汝を愛し給うを見て、

汝をその業に励ましたであらう。

けれども、私がかくシオンの山に

贖われたる十四万四千に加えられて、

羔の君のみもとべに在ることが、

地を汝と共に歩くよりも、

汝にとつて恵福である。』

私もダンテの詩句を借りて、

『かつて汝が世に在った日に、

人がおのれを問わぬものとなす道を、

いつも私に身をもつて示してくれた

汝のなつかしき慈父の如き面影が、

わが心鏡に今なお鮮やかである。

汝の実存が私を主イエスに、

わが地に在る限り駆り立てるであらう。』

と、ねぎらいの言葉を天に返す。

一九二一年九月二十二日、

二七歳を一期として彼は去った。

爾来、風雪三十年、

彼と私は天地相応え、肝胆相照らして

明けの明星キリストを仰ぎ見つつ、

嵐にも嵐にも旅路を進んだ。」

と。
そういう詩です。



●主體的真理

私たちにとって、聖霊はキリストの霊です。旧約でも「聖き霊」という言葉は二、三回できますけれども、旧約の場合とは違う。預言者には、イスラエルのエホバの神から、霊的な示しがあつたわけですが。その預言者たちが受けとつていたところの神の霊は、贖いを通つてない直接の霊です。ところが、キリストの十字架の贖罪、贖いを経て初めて、聖霊が来る。これはキリスト自身がおつしやつた。

「私は、お前たちに霊を注ぎたいが、ダメだ。我に受くべきバプテスマがある。十字架に自分は懸かる。彼らに十字架につけられるのではない」

相対的現実としては、彼らが、ユダヤの祭司たちやローマの兵隊だの、民衆すらも彼を十字架に懸けると言つたが。キリストは十字架に懸からないで、いきなり天界へ行こうと思えば行けた。けれども、ゲッセマネの祈りでもつて、

「お前はひとの罪のために贖いをしろ」

と。イザヤ書53章のその言葉をキリストは身に受けて、そして、十字架にかかれた。

「我みずから棄つるなり」

と言つている。十字架の贖いは万人に向かつて言われている。けれども、これは、キリストがそう言われたからではない。

「キリストが言われたことを、自分が本当に受けとつているか」

そこだけが問題。いわゆる「客観的真理」ではない。これは

「主體的真理」

という。主體的真理というのは、キリストと我との直接関係において成り立つ真理で、傍観的に第三者的にいくら信じたつて、これはダメなんだ。その意味において、先ほどの親鸞の言葉のように、

「弥陀の五劫の思惟はひとえに親鸞のためであつた」

と、親鸞だけのね。

「キリストの福音はひとえに我がためであつた。ひとはどうだか知らん、とにかく

私はキリストの福音でなければどうにもならない」

と。その福音は一对一のどん底の絶対的な関係です。

「絶対関係」

というのは矛盾した言葉ですけども。「関係」というのは相対的なものだけでもね。他との比較を絶するところの関係です。これが即ち、贖い。

「こちらの信仰の具合がどうだ、実存がどうだ」

と、そんなことではない。こちらの一切に拘らず、絶対恩恵として、

「お前のために私は十字架にかかったんだ。無条件にこれを受けとるか」

と。平伏して無条件に受けとると、もの凄い世界がやってくる。それが聖霊の世界。



「わが受くべきバプテスマ、十字架を受けたら、お前たちに聖霊を与えるぞ。祈って待っている」

と。十字架と聖霊は絶対に離すことができない。我々にとって聖霊とは、十字架を土台とした霊である。このことが一般のキリスト教界で本式に――神学的には言うかも知れないけれども――

「本式に自己の告白として、これを受けとっているかどうか」

これだけが問題。だから、信仰の真理というのは、告白にならなければ、この真理は受けとっていることにはならないんです。

「こうであると聴きました。こうであると学びました」

なんていうのではダメなんだ。そういう事態に來たから、

「これは誰が何と言つても、世界中の人が何と言おうが、自分はそれを否定することができない」

と。これが福音の本当の真理なんです。

●キリストの中に体当たり

「偽預言者」^{にせ}がちよこちよこいます。そんなものは問題じゃないから。

「キリストの生まれ代わり」

なんて、冗談言うなど。

「釈迦の生まれ代わり」

なんて、何を言っているかと。その点で、我々は、キリストの直弟子のパウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、彼らが新約聖書で証言しているところの、この事態と同質の世界に入らざるを得ない。それだから、もう主観的にあらざるところの、本当の主體的な確信が来るわけです。

「救われている」

という。

「救われるであろう」

じゃない。それは、

「私の信仰が大分良くなったから救われている」

と、そんなことを言っているのではないです、絶対に。こっち側の何ものでもない。

それで、今言っている「聖霊」というのは、今申しあげたような、そういう霊です。キリストの霊。十字架を経たキリストの霊。それとの交わりの世界が「祈り」なんです。だから、祈り入る、聖霊の中に。御霊のキリストの中に祈り入る。入らなければ、「祈入」しなければ。ただ祈っているのではない。祈り入ると、それが本当の「霊然」の世界になる。キリストだけが「神然」の世界。「み霊、然り」の世界です。



だから、

「十字架・聖霊のキリストは具体的にどこか」

というと、福音書です。福音書のキリストの、どの場面でもいいですよ、そのキリストの中に自分を投げ入れるんです。

「キリストに投げ入れる」

とはどういうことかという、福音書のキリストの中に自分を体当たりしていくことが、

「キリストの中に投げ入れる」

ということ。何か摩訶不思議なことを言っているのではない。全聖書の中心は何といても福音書なんです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。キリストの直々の世界ですから。始めにして終りというのは福音書なんです。黙示録の本当の現実、福音書のキリストが既に現している。まあ大変なものだ。福音書の中には無駄な言葉は一つもないですよ。旧約には無駄がたくさんあるよ、ひとを躓かせる言葉もね。しかし、新約聖書というのは全くみ霊の世界の言葉だね。大変なものだね、これは。どんな文学も、どんな哲学も、この新約聖書にはかなわない。

だから、何回でも繰り返し返して読んで、読むと同時に、必ず力が来る。光が来る。そういう読み方をしなければ、何回読んだって。読み方は、読んでいて文字が文字でなくなるわけです。ナポレオンの言葉じゃないが、「生き物」みたいに。楽しくてしょうがない。電車の中で読もうがどこで読もうが。だから、私は若い人に言うんだ。聖書を一つ破って、福音書をポケットに入れて読めと。

●霊と心をもって祈る

コリント前書14章15節に、

「¹²然らば汝らも霊の賜物^{たまもの}を慕う者なれば、教会の徳を建つる目的^{めあて}にて賜物の豊かならんことを求めよ。¹³この故に異言を語る者は自ら称き得んことをも祈るべし。¹⁴我もし異言をもって祈らば、我が霊は祈るなれど、我が心は果を結ばず。¹⁵然らば如何にすべきか。我は霊をもって祈り、また心をもって祈らん。我は霊をもて謳^{うた}い、また心をもて謳わん。」（コリント前14・12～15）

「賜物」

とは「カリスマ」ですね、霊的な力です、聖霊に即して。私は

「即する」

という言葉が好きなんだ。一つになっている。「一如」、一の如し。

「即如」

という言葉もある。

福音書のキリストに、瞑想してね、そしてそのキリストに、



「主さまー」

と体当たりの呼びかけが続いていく。そうすると、同時に聖霊の世界に入ってしまうから。それで、即して、霊を即して祈る。

み霊のキリストと、キリストのみ霊と一つになる世界です。それは、ある意味において、本質的には異言の世界になる。この世の言葉でないところの神の根源語の。そうすると、普通の言葉で表現できないような内容になってしまう、何だか知らんけれども。これが、

「霊をもつて祈る」

み霊でもつて祈るということ。その内容は、言葉にはなくても、はつきりしている。そこで、具体的に祈りたいことも、その聖霊の祈りにおいて、その内容が――一種の内側の言葉だね、その言葉は同時に力を有つ――同時に力を持って、そして働いているわけです。人のために祈って、その人は知らなくて一向差し支えない。そういう、本当の現実なんだ。これが霊をもつて祈る世界。聖霊に即した祈りの世界。

「心をもつて祈る」

というのは、今度、人間には魂がある。霊魂。それから、心。

「 pneuma (霊)、 nous (心)、 soma (体) 」

と、パウロも言っている。その「 nous 」 「心」の世界。これは私たちの心情の世界。人間の心をもつて祈る。これはどちらかというと、「心」の世界ですから、「愛」です。「霊」の方は「力」です、実力を持っている。この愛の祈り。実は、

「霊をもつて祈る」

「心をもつて祈る」

は一つになるんですけれども。ただ分裂するわけじゃないですから。自在に霊で祈り心で祈るという、そういう世界。

それで、私たちの祈りの面でも、普通こうやってお互いに祈る。その時も、霊的な質と心的な質とが、両方とも渾然^{こんぜん}としている。そういう祈りを聴いていると、何だか知らないけれども、非常に暖められて、ありがたく受けとる。霊だけの祈りだと、ちよつと恐いことがある。こわいけれども、しかし、それは決して相手を審く祈りではないから、この聖霊の世界は。聖霊それ自身は愛ですから。

聖霊は愛の霊だというのは、要するに、霊と心を聖霊は実は内側に持っている。力とその情といえますかね。だから、我々の本当の祈りは、いつもその霊と心とが渾然として、霊が主体となることもあるし、心が主体となることもあるが、どちらかが欠けてしまうわけではないですよ、パウロがこう言っているけれども。

● 円現

何でも単に分離している世界はダメです。主体性は二つあるけれども、やはりそれが一



つになる。東と西も一つになる。東西がやっぱり一如にならなければダメ。いつも、

「東だ、西だ」

なんて言っているうちは。真理の両極がちゃんと一つになってしまっている。

「円現」

という。だから結局、真理というものは、もし形で表そうとすると、円になってしまう。円は、同時に無限大です。輪(円周)があるけれども、輪は在って無きが如き。

この焦点はキリストだから。神の現象体。神は無相の世界ですから。相は無いです、神さまは。この無相の神さまをキリストは、

「父よ！」

と呼んでいるんだけど。「父」というのは人格だね。人格であると共に、

「霊格」

なんだ。霊格であると共に人格である。それがキリストの世界なんです。

「神は霊なれば」

と言っている。その霊なる神を何と呼んでいるかというと、「お父さん」と呼んでいる。「父よ」と呼ぶことは何かというと、権威の世界です。神の権威を「父よ」といつて呼ぶ。そのことはエペソ書6章に、パウロは凄いことを言っているわけだ。

「¹⁰終に言わん、汝ら主にありて其の大能の勢威に頼りて強かれ。」

という。「強かれ」と言ったって、

「主にありてその大能の」

という、主の中には神の大能がきているから、その勢いによって強くならざるを得ない。自分で力む必要はない。キリストの権威は本当にこわくない。こないだ私は夢を見たと言ったでしょ。ゴルバチョフとブッシュを相手に私は夢の中でのを言っている。それは権威の世界だから言える。

¹¹悪魔の術に向かい立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。¹²我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある

悪の霊と戦うなり。」(エペソ6・10、12)

「悪魔の術に向かい立ち得んために」

と。悪魔は霊的な力があるからね。しかし、悪魔の霊的な力も、このキリストの力にはかなわない。キリストはサタンをやっつけたから。

「神の武具をもて鎧うべし」

と。本当は戦争のことは禁物にしているんだけど、例えて言うならば、霊的な戦いを具象的に言っているわけです。

「政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり」

と。これは、キリストの権威でなければ、聖霊の権威でなければ、戦えないです、我々の



信仰なんて言っちゃって。

まあとにかく、今は、日本の政界もしようがない、実業界が。世界も、とにかく何か武力が背景になってものを言ってみたり。キリスト教国といいながら、軍備が凄いんだからね、みんな。大矛盾を犯している。

動物の世界では獅子が一番強い。羔は弱いんだ。ところが、この一番弱い獣である羔がキリストなんだ。ところが、

「羔の怒」

という言葉がある。羔の怒は、相手が獅子であろうと何であろうと、みんなやつつけてしまう。黙示録のところに出ている。「羔の怒」なんて、これほど矛盾した言葉はない。一番柔和なるものが一番力をもっている。

グラッドストーンも言っているよ、政治家が一番悪いということを。大政治家グラッドストーンがそう言っている。政治家それから軍人。軍人は、政治に関与しない限り、軍人は非常にひたむきで、軍人の中には素晴らしい信仰の人がある。ゴルドン將軍なんて素晴らしい軍人です。あのゴルドン將軍だよ、キリストの墓をここだと言って発見したのは。

●キリストの聖霊の権威

そういう霊的な力に、私たちは自分では勝てない。ところが、キリストの聖霊の権威では、相手がサタンであろうと勝てる。だから、ルターが言っているんです、

「キリストという一言、十字架という一言。こういう言葉を発すると、サタンは逃げていく」

と。讃美を歌うと、サタンは讃美歌が嫌いだから逃げていく。

ルターは面白いね。パウロさんをキリスト教の歴史で一番受けとったのはやはりマルティン・ルターです、構造的にしっかりと受けとっているのは。霊的には、アッシジのフランシスとかザビエルとかは、霊的な次元ではルターやカルビンよりも上だけれども。福音を素晴らしい構造に於てはつきり受けとっているのはルターです。凄いよ、ルターの言葉は。

「¹³この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、^{あだ}凡ての事を成就して立ち得んためなり。¹⁴汝ら立つに誠を帯として腰に結び、正義を^{むねあて}胸当として胸に当て、¹⁵平和の福音の備えを靴として足にはけ。

「正義」という訳があまりおもしろくない。「義を胸当として胸に当て」だ。「平和」ではない、「平安の福音の備えを靴となし」だ。どうも訳がダメだね、これ。神さまとの関係がちゃんと立っているのが「平安」というので、「平和」ではない。平和は人間同士の関係。

¹⁶この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。¹⁷また救の^{かぶと}冑および御霊の^{つるぎ}剣、すなわち神の言を執れ。

「御霊の剣は神の言だ」



と面白い言い方だね。聖霊の剣は神の言。だから、パウロが剣を持っている絵をよく描くね。あれは、パウロは何も武器を執っているのではないんだ。エペソ書のこの言葉に即して描いている。パウロの持っている剣は、あの絵の剣は、神の言葉だ。神の言は力があるからね、救いもするし、審判もする。

18 常にさまざまの祈と願とをなし、御霊によりて祈り、また目を覚し凡ての聖徒のためにも願いて倦^うまざれ。19 又わが口を開くとき、言を賜わり、憚^{はば}らずして福音の奥義を示し、20 語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。」(エペソ6・

13～20)

福音の「奥義」とは、「ミステリオン」です。パウロの言葉はいたれり尽くせりだね。福音の事態をいろんな武器でもって言っているだけのはなしだ。要するに、

「キリストの福音を着ろ、キリストの福音そのものを本当の武器とせよ」

と。「靈器」だよな。「器」の字も器でなくていい、霊の「氣」、「靈氣」だ。この靈氣にはかなわない。まあ、いろんな宗教もあるけれども、要するに、キリストは特別ですからね、これは本当に。こんなことを普通の仏教徒に言ったってしょうがないよ。いわんや、イスラム教なんてのは。言う必要はない。身をもって証していく。聖書の世界は、人間の歴史が終わるまで、これが一番本当だということは、一番力がある一番本当の世界だということとは、聖書みずからが、神の言みずからが証明する。

「お前たちが叫ばなければ、石が叫ぶぞ」

とキリストは言われた。凄いいね、キリストというひとは。「石が叫ぶ」と言う。

女の方もそうですよ。女は、優しさが大事だけれども、優しさの奥に何ものも侵すことのできないものを持っている。これはキリストの義である。その愛は何ものをも溶かしてしまう。キリストの義と愛とは、これは区別することができない。義愛一如の世界。神の御意は究極において愛ですから。神の御意を現ずることを「義」だと言ったでしょ。その義の内容は愛なんだ。義の内容は愛なんだ。愛というのは人を救うこと。かわいがることではない。人を助け救ってしまうこと。だから、天下無敵なんです。

「どんな敵をも愛せよ」

というのは

「敵をも救え」

ということ。

「救えるぞ」

ということ、神の霊の力は、聖霊の力は。それを、パウロや使徒たちや、歴代の、カトリックでもプロテスタントでも、本当のチャンピオンは、十字架につけられながらも讃美歌を歌って、



「彼らは気の毒だ」

というわけだ。熾^{さか}んなる哉だ、この福音の世界は。単なる「悟り」じゃないよ。そういう、最後には、黙示録が暗示しているところの――黙示録も表現し切れない――暗示しているところの、その驚くべき神の国。その一種の表現を私がやりますけれどもね。そういう神の国。もう誰に何と言われようと、一向に差し支えない。お気の毒さま、というわけだね。どうも、しょうがないね、私は。

これが、聖霊におけるところの、私たちの真の祈り心という。祈りは力を持っています。熱心だから力があるのではないですよ。もし「熱心」という言葉を使うのなら、それは「キリストの熱心」がするんです。こちらは祈らせられる。聖霊の呻きなんです。ロマ書8章の26節。ですから、楽しいね、祈りの世界は。必ず何らかの意味において聴かれています、祈り以上に。

●あなた方は天下一品

あなた方、一人びとりは天下一品ですから、比較を絶するんだ。人間というものは比較を絶した存在なんです。

「私はあれよりもどうだ、これよりもどうだ」

とそんなことではない。みんな、相対的存在でありながら、絶対的存在なんです。相対を絶しているんです、神との関係があればだよ。

日本の民主主義はダメなんだ。神との関係のない民主主義なんてものは、とんでもないんだ、本当は。ヨーロッパでは何といつても、福音が土台になっているからね、ゴルバチョフでも何でも。違うんだよな、同じ「自由」と言つても。どこまで自覚しているかは知りませんけれどもね。けれども、とにかく、国境が在れども無きが如き世界に入らなければダメなんだよ。

「幼子^{おさなご}には国境がない」

と私は言っているように。それぞれの民族、それぞれの種族の特色は大いにそれぞれであつていい。また、それぞれであつてなければならぬ。全体主義じゃない。日本人は日本人らしく、ドイツ人はドイツ人らしく、ロシア人はロシア人らしく。バラはバラらしく、桔梗は桔梗らしく、リンドウはリンドウらしく。「らしき」に於て、太陽の光が、太陽の色彩が現れている。それだから、大調和をなして、

「ああきれいだなあ」

とこう言う。みんな紫でもダメだし、みんな赤でもダメだし。もうはつきり現しているんだよな、これが。それで、あなた方は

「天下一品」

です。自己主張じゃないよ、この「天下一品」は。神^{かみ}、主^{ぬし}張だから。キリスト^{きりす}、主^{ぬし}張です。



「私はキリストを現しているんですよ」

と。AさんはAさんらしくやっている。BさんはBさんらしくやっている。みんなそれぞれでいい。「恵み」を本当に受けとっていると、それが本当の「信」の現実で、それが「行」に転ずる。

「パウロの恵・信・行」

の世界なんだ。「恵・信・行」が一如の実存となる。あらしめられている。止むに止まれずして、楽しくてしょうがない。

「キリストに捕らわれている」

とはそういうことなんだ。

「これほど自由な世界はない」

というわけだ。これは、本当に、福音書をじつくりと受けとつていかなければ、私が言っているところの「自由」なんてのは分らない。

今日は、I先生がやってらっしゃったけれども、一生懸命で絵を描いていらっしゃるうちに、自分の身体が治ってしまった。そんなもんだよ。薬じゃない。自分の使命に打ち込むというと、力が来るものだから、治ってしまうんだ。

使命感を持つて生きる人が少ない。今の若い人たちの教育がそういうようになっていから。

「どこへ行って、どれだけすれば、暮らせるか暮らせないか」

なんて、冗談言つてはいかん。

「暮らせるか、暮らせないか」

じゃないんだ。だから、本当に、精神的革命を起こしていかなければ、ダメなんですよ、日本人は。その一人びとりが、あなた方一人びとりなんだ。やってくださいよ。周りの人を、

「何か知らんが、あの人は本当の力を持つているな」

と。そういうわけで、皆さん、本当に今日は朝から晩まで、この福音の世界に、いよいよ進みに進み、光より光へ、力より力へ、恵みより恵みへと展開せざるを得ない。あなた方一人びとりが、

「どうしてこんなに私は元気になってしまつて、力が来るんでしょうか」

なんてなことになつちゃうんだ。みんな一人びとり、やっていることが楽しくなる。

祈りの時間はそんなに長くないです。祈りは、私は短いけれども、長い時は私だつて一時間ぐらいじつーと祈ることがあるよ。もう凄いよ、そうすると。もう別な現実に入つてしまうからね。別な現実には、地上にありながら。天国的な現実には。詩を書いている時もそうなんです。そういう世界でなければ、私の詩は書けないです。

では祈りましょうね。

